



1997 年(平成 9 年)
6 月号 (No.625)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

「環境に貢献した世界の女性リーダー25人」に選ばれて……………	1
マナスル初登頂40周年記念切手の後日談……………	2
追悼・徳島和男 涸沢に斃る……………	4
報告	
指導委・山岳スキー研修会……………	5
土曜会・赤シャツグループ近況……………	6
96同期会・サクラハイク……………	7
96同期会が発足しました……………	7
フィルムビデオ委・ビデオ作品を貸し出します……………	7
ビデオテープ・保管リスト……………	8
海外の山・サウスコルから1年後の帰還……………	6
支部だより	
宮崎支部・九州中央山地の旅……………	10
東九州支部・新緑の定例山行……………	11
東西南北	
「白神山地問題」について……………	12
白神山地についての反論……………	12
坂倉登喜子さんの出版記念会……………	13
図書紹介……………	14
『南極点スキーマラソン』『ひとりぼっちの反乱』『MONGOLIA』『生と死の分岐点』	
山と医療・時差日程への順応……………	15
図書室受入報告……………	15
新入会員・住所変更……………	16
会務報告……………	18
ルーム日誌・INFORMATION……………	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10~20時
水・金曜日 13~20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13~20時

「環境に貢献した世界の女性リーダー25人」に選ばれて

堂本暁子

ナイロビのUNEP(国連環境計画)から「あなたは二十五人の一人に選ばれました」と連絡を受けた時には、何に選ばれたのかさっぱり見当がつかなかった。何度かファックスをやり取りしているうちにわかったのは、今年はUNEPの創立二十五周年にあたること、そしてそれを記念して「環境に貢献した世界の女性リーダー二十五人」を選び、三月六日にニューヨークの国連本部で表彰式を行う、ということであった。

私はびっくりして、どんなメンバーなのかを問い合わせたところ、ノルウェー元首相のグロ・ハールレム・ブルントラントや歌手で環境保護活動家として知られるオーストラリアのオリビア・ニュートンジョン、国連人口基金事務局長のパキスタンのナフィス・サディック、ザ・ボディショップの創設者として知られるイギリスのアニータ・ロディックなど、そうそうたる顔ぶれである。顔なじみのアメリカのベラ・アプザック、インドのバンダナ・シヴァの名前もあった。彼女たちは地球サミットに向けて精力的に活動が続けてきた人たちである。私は一九九〇年にGLOBE(地球環境国際議員連盟)に入ったのがきっかけで、地球環境問

題に取り組んできたが、主として生物多様性がテーマであった。

若い頃に登った南アルプスの稜線には、コマクサが咲き乱れていたし、冬の立山では頭の赤が目立つライチョウをよく見かけたものである。しかし、わずかに数十年の間にコマクサもライチョウも絶滅の危機に瀕するようになった。東北の連峰は、飛行機から見ると、まるで稜線をえぐったように林道が走り、オオタカやイヌワシたちの営巣地が次からつぎへと破壊されている。

しかも、温暖化が進めばこうした動物や植物は生息環境の変化で、絶滅が加速されかねない。いまや、日本の野生植物の六種に一種は絶滅の方向へ向かっている。これでは、四季の変化に富んだ日本の自然の貧困化がじわじわと進んでいく。

こうした実態を知って、私は無我

夢中で走り出していた。日本の山だけではない。南米の熱帯林も、ヒマラヤのシヤクナゲも、ヨーロッパの森も、危機にさらされている。自然を守り、生態系を保全するために生物多様性条約を実効あるものにしたい、というのが私のこの六年間の願いであり、仕事であった。

「環境の保全といえば男も女もないだろう」と言われるが、自由市場経済に正面から勇気を持って立ち向かっているのは意外に女性たちなのだ。と気付かされた。カナリアが炭坑で毒素のインディケーターであるように、女性たちも意識的にせよ無意識的にせよ、時代の変化を感じとり、思想の変革を行い、また行動に移してきた。

経済中心主義から「持続可能な開発」という価値観の転換を実現したのが、当時ノルウェーの首相ながら



「環境に貢献した世界の女性リーダー25人」に選ばれた、左からエジプトのエルセバイエ、堂本、タイのディーテス、チリのホフマンの各氏

世界環境会議の議長を務めたブルントラントである。彼女がまとめた「我ら共通の未来」は、最も迫力のある、そして二十一世紀への方向性をしっかりと指し示した報告書だ。その中で彼女は「私は最終的に、未来を直視し、次の世代の利益を守るという挑戦を受けて立つことにしました。変革のために我々は何をすべきかははっきりさせる必要があることが余りに明白であったからです」と述べている。世代間の平等、大量消費型社会から循環型社会への転換を主張し、世界のリーダーを説得す

る迫力を、彼女は持っていた。元アメリカの下院議員だったベラ・アブザックは、世界の女性たちのネットワークをつくり、地球サミットをはじめ、国連の地球規模問題に多大の影響を与えた。大変な大物おばさんである。カナダのセオ・コルバーンは、化学物質が生物の生殖機能に影響を与えることを立証した。鳥や魚だけではない、人間とて例外ではないのだ。彼女は著書の『われらの奪われた未来』で人類と自然環境の在り方について警鐘を鳴らした。九十年代のレイチェル・カーソン(『沈黙の春』の著者)と呼ばれる所以である。

一方、途上国の立場から植物や動物の多様性を失うことの恐ろしさを告発し続けたのがパンダナ・シヴァである。生物の多様性を失うことは文化の多様性をも失う、と彼女は主張する。ケニアのワンガリ・マタイも、これまた芯の強さは人後に落ちない。何回投獄されても、大統領からの弾圧を受けても、樹を植える運動をやめはしない。

私自身は、生物多様性というテーマに出会ったおかげで地球という惑星の魅力、そこに誕生した生態系の

神秘をかいま見る機会を与えられた。数多くの動物や植物と出会い、地球環境を守ることに使命感を抱いている女性たちとも出会った。

三月六日にニューヨークの国連本部に集まった女性たちは、誰一人として気負った人はいなかった。みんな自然体である。たちまち、仲良く

ネパール・日本国交樹立四十周年記念切手発行 マナスル初登頂四十周年記念切手の後日談

■計画の発端

マナスル登頂四十周年の記念切手を出したら、という提案は一九九五年十月、来日中のネパール登山協会(NMA)ダワ・ノルプ会長の発案で、具体的に動きだした。

たまたまHATJの歓迎会の席上、林田正幹会員が読売新聞十月三日付夕刊記事「あの場面、あの記録」に、今西さんがマナスル山頂に立つカラー写真が出ているのを見せたところ、大変気に入って、切手のデザイン案を日本側で作成してほしい旨の依頼を受けた。

■ネパール側との折衝

記念切手を出すのは資金もかからないと思われたので、村木会長に報告。早速デザインを日大理工学部建

なって、二十五人のネットワークで世界中の女性だけではなく、男性にも、そして若者にも高齢者にも広げていこう。動物や植物などあらゆる生物と人類が共生していくことで地球は守れるし、平和な世界を実現できる、と語り合い、また世界の各地に散っていった。

松田雄一

築科のCGの先生にお願いして数種類作ってもらい、十一月中旬カトマンズを訪れる神崎評議員に託して、ダワ会長に届けてもらった。

これに対しNMA側は、事務局長のプミ・ラル・ラマ氏が担当。ただちに観光・航空省を通じて情報通信省郵政局にアプローチした結果、十一月二十三日付、九項目にわたる必要な説明資料提出の要望があり、資料を取りまとめて送付した。一月二十九日になって、本件は政府の公式のルートに乗って進行中であるとの連絡があり、期待して待っていたところ、二月二十八日付の来信で、「発行までに最低四か月はかかるので、五月九日の登頂記念日には到底間に合わない。ただし来年五月の四



HMG/N Postal Services Department
Nepal Philatelic Bureau, Kathmandu.

一九九七年四月六日発行の四十周年記念切手
下はネパール郵政局のマーク

これは不調に終わった。
新提案を行った。
これに対しNMAからは、四月十一日付、新提案は早速郵政局長に伝えたが、この種の切手は郵政局の年間計画に入っていないければ突然言われても無理である、との返信が届き、NMAを通じての記念切手発行計画は不調に終わった。

この年の秋に、駐ネ日本国大使館で日・ネ国交樹立四十周年記念のレセプションを開催する計画があるとの情報を得た。そこでNMAに三月八日付で、今西大阪名誉総領事がマナスル山頂に立つデザインは、日本とネパールの両国外交上の原点でもあり、そのまま「日・ネ国交樹立四十周年記念切手」に使用してもおかしくないのでは、再考願えないかとの新提案を行った。

十一周年記念には間に合わせる「旨の確約が取れたとの連絡があった。」
■日・ネ国交樹立四十周年への新提案

■マナスル登頂四十周年記念カバリの作成

一九九六年の秋になり、大使館主催の国交樹立四十周年記念レセプション・パーティーが十月三日にカトマンズで開催され、翌四日、本会主催で「マナスル登頂四十周年記念パーティー」を開き、登山当時お世話になった方々をお招きして謝意を表した。これは会報「山」六十九号「マナスル登頂四十周年ネパール行事報告」として既報の通りである。

この時、ネパール・日本研究センター(NNRC)主催の「マナスル登頂記念展」には、日本から持参したヒマラヤ記念切手のFDC(初日カバー)も展示された。出席されたネパール郵政局の国際郵便課のB・J・パウデル課長は、マナスル登頂四十周年記念切手の発行が間に合わなかったことは残念であったとして、遺憾の意を表された。

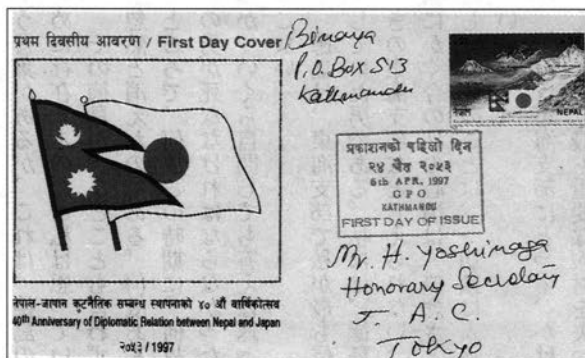
この展覧会で切手展示部門を担当された、NNRCの終身会員であるモハン・N・ラナ氏(ネパール郵政局の切手デザイン・オフィサーでもある)は、記念切手の代わりにネパール・日本両国で発行されたマナスルの切手を使用した記念のコンビネーション・カバーを作成。これに使用したネパールのマナスル切手には、レセプション開催日当日の十月

四日の特印が押された。このカバーを日本に持ち帰って、日本のマナスル初登頂記念切手には、発行日の四十周年に当たる一九九六年十一月三日付の消印が押された。このようにして日・ネ両国の協力によりコンビネーション・カバーは完成され、関係者に喜ばれた。(右参照)

■日・ネ国交樹立四十周年記念切手の発行

その後ラナ氏からは、新年のグリーティング・カードに添えて、ネパール郵政局の一九九七年切手発行スケジュール表が送られてきた。それによると今年の十一月にこの切手が発行される計画になっていた。ところが二月十三日付のNMAからの情報では、切手は現在印刷が進行中であり、近日中に発行される予定、とのことであった。

一方クリシュナ氏からも、三月二十一日付でマナスル遠征と日・ネ国交樹立四十周年の記念切手が近日中に発行される見込みなので、マテマ駐日ネパール大使にコンタクトを取りたい旨の連絡があった。それで大使に発行予定日などについてたずねてみたが、本国からは連絡が入っておらず、近日中というところしかわからなかった。勝手に五月の登頂日頃ではないかと推測していた。念のため、吉永理事からネパール



今回発行されたFDC



96年11月3日完成のマナスル登頂40周年記念カバー

の友人ビナヤ氏に問い合わせたとこ
ろ、四月十七日付でファックスが入
り、記念切手はすでに発行された
のこと、翌日外務省南西アジア課に
問い合わせ、次のようなことがわか
った。

一、発行年月日：一九九七年四月六
日（注：同日カトマンズにおい
て、ジャルナート・カナル情報
通信大臣が出席の上、本切手発
行記念式典が行われた）

二、図案：両国国旗（図面中央下部）
エベレスト（中央上部）、マナ
スル（右側）、富士山（左側）

三、図案企画：クリシュナ・バハド
ウル・バルマ氏（注：わが国
のマナスル登山隊一九五六年
登頂の許可取得に多大な尽力
をなし、現在ネパール・日本研
究センターを主宰している）

四、図案デザイン：モーハン・ナル
シン・ラナ氏（画家）

五、切手文面：40th Anniversary
of Establishment of Diplo-
matic Relations between
Nepal and Japan.

六、印刷：四色刷り、スイスで印刷
七、額面：十八ルピー（ネパールか
ら日本への航空便書状料金）

八、発行枚数：百万部

その後大型連休明けにはビナヤ氏
から吉永理事宛に、この記念切手の

FDCが届いた。同時に切手シート
の現物が宮原魏氏から届いた。
（FDC、記念切手は三ページ参照）

* * *

このように、今回の記念切手の発
行については、当初はNMAが大変
な努力をし、昨春秋の本会主催によ
るマナスル記念行事以降は、本会名
誉会員のバルマ氏が図案を企画し、
同氏が主宰しているNNRCの終身
会員であるラナ氏がデザインの原画
を描いて実現にこぎつけたものであ
る。この機会に改めてバルマ氏に謝
意を表してこの報告を終わりたい。

*クリシュナ・バルマ氏は五月二十
九日、心不全のため逝去されまし
た。行年七十二歳でした。

追悼

徳島和男・涸沢に驚る



尾上 昇

五月五日の子供の日の午後であつ
た。出先の私の携帯電話に、とんで
もない、夢想だになかった悲しい

知らせが飛び込んできた。

この日の午前九時半頃、穂高涸沢
のザイテングラードで、徳島が雪崩
に巻き込まれ死亡したというのであ
る。

私は、思わず、そんな馬鹿な、何
かの間違いではないのか、と電話の
主を怒鳴りつけていた。私の頭の中
は、たちまちにして無念さで一杯と
なり、徳島の顔が浮かんだり消えた
りするだけで、彼の死にどのような
対処したらよいのか判断するのにし
ばらく時間を必要としなければなら
なかった。

徳島は、東海支部の副支部長であ
る。付き合いは、三十年近くなが
が私が支部長に就任してからは、支部
の一番重要な総務関係の仕事を一手
に引き受けてくれ、文字通り私の片
腕として支部運営に携わってくれた。

また、東海支部のお家芸である海
外登山でも、徳島は、隊長として雪
蓮峰の初登頂、クラウン峰の初登頂
を成し遂げ、この成果をひっさげて
今月の十六日にK2の隊長として、
勇躍日本を発つばかりになっていた
のである。

徳島は、支部では、トクチャンと
か、トクサンとか呼ばれていて、何
事にも誠実に、真摯に立ち向かう姿
勢は、高い信頼感を与え、多くの仲
間の人望を集めていた。「篤実」とい

う言葉があるが、これは、徳島のた
めに存在するのだと私は思っている。
その徳島が、ひとことも言わずに
忽然と消えたのである。何故あんな
ところで、何故この時期に、何故あ
の男が死ななければならなかったの
か、いくら自問しても答えは返って
こない。

徳島は、東海支部で私が最も信頼
していた男である。私には、徳島抜
きの東海支部など考えられない。と
にかく今の私の心境は、無念さと悔
しさで先のことは、一切頭に入らな
い。

ただ、東海支部にとって、かけが
えのない、最も重要な人材を失った
との思いは、支部の共通した認識で
あることは確かである。

K2隊であるが、徳島を中心にし
て完全に準備が整っていたこと。徳
島のとを、田辺が引き受けてくれ
たこと。全隊員が一人も欠けること
なく、徳島の遺志を継いで、K2の
頂に立つと決意表明してくれたこと。
このことから、支部としては、K2
登山隊の派遣を改めて決定した。

本隊は、予定通り五月十六日、イ
スラマバードへ向けて成田を発った。
この出発を一番喜んでくれたのは、
外でもない、泉下の徳島自身であつ
たであろう。

徳島和男 享年五十二歳。合掌。



天神平から谷川岳本峰に登頂した研修参加者

指導委員会

中上級者対象 山岳スキー研修会を開催

報告

REPORT
6月

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

四月十二日～十四日、上越国境の谷川岳において、指導委員会主催の中上級者対象山岳スキー研修会が開催された。今年は全国的に例年より約一か月分は積雪が少ないといわれているが、谷川連峰も五月中旬並みの残雪で、当初予定していたコースを多少変更せざるを得ない事態となった。しかし春の移動性高気圧のおかげと、今回の研修会は中上級者対象ということで参加者の足並みがそろっていたこともあり、非常に中身の濃い研修会となった。

参加資格をある程度限定させてもらった今回の研修会には、主任講師を務めた私、熊崎和宏以下講師四名、研修生七名と精鋭ばかりの総勢十一名が、東京のほか大阪や新潟など各地から参集した。

初日の十二日は、朝七時に土合山の家に集合。キックステップによる雪上歩行技術の研修として、天神平

から谷川岳本峰に登り、スキーで天神尾根經由熊沢沢に滑り込むコースである。頂上から西黒沢源頭部にかけての大斜面はオフピステスキーの醍醐味を存分に満喫できる素晴らしいバーンである。幸いコース上は雪の状態もよく、熊沢沢で積雪層観察やブロック雪崩回避判断などの研修を行った後、土合に滑り込んだ。

翌十三日は、前日と同ルートをアイゼンワークで谷川岳に再度登頂し、さらに国境稜線を一の倉岳まで縦走して芝倉沢に滑り込むコースである。この日も快晴無風の最高の天気恵まれた。谷川岳頂上直下で研修生の一人がバランスを崩して転倒した際、額をパッキリ切ってしまうというアクシデントが起こった。応急処置の後スタッフほか三名とともに自力で下山してもらい、残りのメンバーで予定通りのコースを行った。

芝倉沢は上部カールボーデンの最大傾斜が四〇度はある大斜面から、幅一〇メートル程度しかない、通称『のど』といわれる急傾斜のゴルジュ帯を通り、『S字』と呼ばれる中斜面へと続く標高差一二〇メートルあまりの素晴らしい山岳スキーフィールドである。この時期はまだ、クレバスやベルクシュルントはほとんどないが、稜線の雪底崩壊によるブロック雪崩の危険に常にさらされる

ため、一時的とも気は抜けないものの、絶好の雪質に恵まれ、存分にスキー滑降技術を研修することができた。

芝倉沢を滑り切ったところにある我が成蹊大学山岳部の山小屋『虹芝寮』では、強烈な春山の陽射しのもと、ついに誘惑に負け、缶ビールを数本空けてしまった(私の本業は虹芝寮の管理者で、事前に自らビールを担ぎあげておいたのである)。まだ日は高く、ここから湯檜曾川沿いの平坦な樹林帯をのんびり土合に戻った。

最終日の十四日も、気を緩めることなく、三たび天神平に上がり、危急時対策としてクレバス転落者の救助技術と負傷者搬送技術の訓練を行った。その後熊沢沢の別ルートで滑降して土合に戻り、昼過ぎの解散となった(有志は引き続き水上温泉で露天風呂と蕎麦&ビールの研修に向かったそうである)。

私も指導委員会を担当して三年目になるが、いまだに試行錯誤を繰り返しながら研修会を運営している。一部の会員には、会報の記事などから『厳しさ』のみが誇張されて印象づけられているかもしれないが、日本山岳会の会員として真面目にきちんとした登山技術を学びたい、という方には胸を張ってお薦めできるも

のであると、私自身確信している。技術面での指導者に恵まれない大雪山岳部なども指導委員会の研修会を大いに利用してもらいたい。正しい技術と理論をきちんと身につけてこそ、安全で、真の意味で楽しい登山ができると思う。

(熊崎和宏)

土曜会・赤シャツグループ

近況をお知らせします

一、四月十三日、定例行事として桃のお花見ハイキング、甲州高尾山へ。山はつい先日の山火事で無惨に焼けただれていました。

帰途、山頂までご案内いただいた山梨支部長古屋氏のご厚意で、同氏経営の原茂ワイン(株)で歓を尽くし解散。参加者十二名。

二、還暦を迎えた会員が着用する伝統の赤シャツを復活します。

制作の労をとってくださる方が不在で、永らく途絶えていましたが、坂倉会員のご紹介で沼田教子さんが制作してくださることになりました。お申し込みその他については、体制が軌道に乗りましたら、発表します。三、皆さま、土曜日の午後、クラブでお待ちしています。運がよければ神谷バーの電気ブランをご賞味いただけます。

(神谷恭平)

海外の山

サウスコルから 1年後の帰還

江本嘉伸

エベレストの賑わいは、今年も大したものだった。

デビット・ブリーシャーズ以下、屈強の「エベレスト男」をそろえるアメリカの「NOVA登山隊」の報告では、四百人ほどがネパール側ベイスにひしめき「アイスフォールの梯子を登るのに一時間半も待った」ほどだった。

「変わり種」は、日本の「ノエビア・エベレスト登山隊⁹⁷」だった。ノエビア化粧品の大倉昊(ひろし)社長を隊長とする隊で、「野球チームを持つ」と同じように企業が登山隊を組織したっていい」とのユニークな発想から生まれた。

明大OBなどベテラン登山家も加わり、第二キャンプまでは出したが、天候の予測からチャンスは少ないと判断して四月二十二日、早々に撤退した。

その二十二日の夜、英国隊のリーダー、マル・ダフが、ベースキャンプのテントの中で睡眠中に死亡した。ダフは一九八五年、スコットランド

隊の隊長としてチベット側から東北東稜をねらい、八一七〇メートルまで到達するなど、この山へ何度かリーダーとしてやって来ており、今回は事前の打ち合わせでアイスフォールの仕事を彼の隊が引き受けていた。

四月二十六日には、今シーズンの先陣をきって、ロチャディ大尉率いるインドネシア隊が早くも登頂に成功した。昨年五月の悲劇の際に、活躍したアナトリー・ブクレエフからロシア人三人、シェルパとともに隊員二人が登ったという。

神々の座に抱かれて眠った者は、静かにしておいてやるのがいい、という考えがある。が、手の届くところにいるとしたら、別だろう。

難波賢一が五月十六日、ベースキャンプにたどり着いたのは、一年前エベレストに登りながら帰らなかった妻康子をサウスコルから下ろしてやりたい、との気持ちからだった。

ニュージールランド隊の隊長、ガイ・コッターが話を聞いてくれた。難波康子が属した公募隊の隊長でやはり帰らなかったロブ・ホルの遺志を継いで、隊を組織している。「登頂後なら、シェルパの協力で下ろしましょう」と、申し出を快諾した。

幸か不幸か、天候が悪化し、登頂日は先送りされた。シェルパたちは

五月十九日サウスコルまで一気に上がり、難波康子の遺体を下ろした。そのまま山麓のパンボチェまで下ろされ、夫の見守る中、茶毘に付された。

「カラパタールの丘からエベレストの頂上を見て、あんなところまで登ったのか、と思いました。これで、ほっとしました」と、妻の遺骨を胸に帰国した夫は話す。

五月二十一日、ベースキャンプに飛んできた高所用ヘリが着地直前、墜落した。昨年、難波とともに遭難し、奇跡的に助かったシーボン・バツク・ウェザーズらを、カトマンズまで空輸した有名なパイロットが操縦していたが、助手とともに無事だった。

五月二十三日、エベレストはラッシュになった。NOVA隊のブリーシャーズ(四度目の登頂)、エド・ヴィースターズ(五度目)ら、ガイ・コッターらニュージールランド隊は、「ラッシュを避けて」なんと午前七時には頂上に立った。

マレーシア隊も同国初のエベレスト登頂を十一時半になしとげ、この日だけで二十二人が登頂した。

欧米人グループに新興アジア各国隊が加わって、なお最高峰の国際化が進む。

96同期会

サクラハイイク

浅間嶺親睦登山

五週間ぶりに日曜日が晴れとなった四月十三日、二十七名の新人たちが武蔵五日市駅に集まった。

幹事から名簿をもらいバスに乗り込む。人里で下車。九時半出発。一時間ほどの登りで幅広い尾根道に飛び出した。正面には今ごろカタクリの花で華やいでいるであろう御前山が実に立派だ。その右手には大岳山や馬頭刈尾根などの奥多摩の山並みが指呼の間だ。

十一時に、桜の木の多い浅間嶺に到着、南に富士山や丹沢の山々が美しい。期待していた桜の花は今一つだった。植物にやたら詳しい石井誠治さんによると、ここの染井吉野は「てんぐ巣病菌」に犯されているとのことだ。満開の桜の下での宴とはいかなかったが、幹事の方々の心尽くしの美味しい豚汁と、ふんだんのアルコール類に「花より団子」と申し分のない気分になった。

初対面の人とも十年來の知己のような雰囲気となり「こんなに楽しいことがあるなら、もっと早く山岳会に入ればよかった」との冗談も飛び出した。アツという間に三時間が過

ぎ、最後に「この会の名前をどうしようか」とか、会の運営についての意見が活発に交わされた。

帰路は、かつて生活の道として人や馬が頻繁に往来していた古道を時坂峠経由で下る。今が盛りのミツバツツジやマメザクラ、スミレなどを観賞し、列は乱れがちだが和気あいあいと歩く。沸沢の滝近くの北秋川橋に着いたのが四時少し前。ここで解散した。(登澤克禮)

96同期会が発足しました

二月二十三日に一九九六年の前期入会者でプレ懇親会を三浦半島の大楠山で行い、四月十三日に前期、後期一緒のサクラハイイクを奥多摩の浅間嶺で行うなど、少々フライング気味にスタートしてきたが、このたび日本山岳会96同期会として正式に発足した。会の趣旨は、先輩方の築いてこられた日本山岳会の縦の伝統を大切にしつつ、同期という横のつながりも大事にするというもので、有志が集まり、幹事として活動していく。当面は以下のような活動を計画している。

■96同期会の運営について

名称 日本山岳会96同期会
会員 九六年度(一九九六年四月一日〜九七年三月三十一日)入

会者全員

趣旨

年に一回の山行と一回の講演会を通じて、日本山岳会の縦の伝統を大切にしつつ、同期という横のつながりの親睦を深める。

運営

有志による企画・運営

行事の連絡方法 日本山岳会会報

「山」のインフォメーション欄での通知及び必要により直接通知。

会費

無料(ただし通信費として前期二回の山行参加者から各千五百円を集めているので、当面はこれを活用する)

会則

とくに定めない。

*ご意見、ご希望のある方は「日本山岳会96同期会メールボックス」宛、郵送またはファックスで。

(96同期会幹事代表・飯田邦幸)

フィルムビデオ委員会

ビデオ作品を貸し出します

フィルムビデオ委員会では、これまで多くの山岳関係のフィルムやビデオ作品を保管しつつ、新しい作品の収集に努めてきました。

そこでこの中から、限定保存のテープを除く作品について、会員に限り貸し出しを行います。ご利用くだ

さい。対象は次ページ掲載の作品リスト〇印のものとします。

●当会ルームで利用

集会室が空いていることを事務局で確かめてからご利用ください。

①事務局に依頼し、ビデオラックを開ける。

②閲覧する作品を選び、備え付けのテレビ、ビデオで。利用時、備え付けのノートに利用者名、作品名他必要事項を記入する。

③音声は周囲に迷惑がからないように調節して。

④閲覧後は元の位置に収納し、事務局に「閲覧終了」を告げてから退室。閲覧は無料です。

●貸し出し希望の場合

*持ち帰って閲覧したい場合は事務局備え付けの「ビデオ借用書」に記入し、持ちだし許可を得る。

①貸出料 一作品三百円(四作品まで)事務局に支払う。

②貸出期間 二週間以内

③返納 持参または郵送で。郵送料金は利用者負担。

*遠隔地居住者の利用

郵送またはFAXで日本山岳会・フィルムビデオ委員会「ビデオ借用書」へ。受け付け次第作品を送ります。

貸出料、送料、包装代(同封の用紙で振り込む)は利用者負担。利用後は返送してください。(山口俊輔)

- 55 高山へのステップPARTⅢ「山岳スキー技術」
 56 ディオティバ隊 立川女子高校隊 (昭和35年)
 57 ディオティバ隊 出発-登頂-撤収まで
 58 ディオティバ隊 出発-登山開始まで
 59 ナムチャバルワ 1991年総集編
 ○ 60 ナムチャバルワ (日中登山隊の60日)
 美の回廊を行く (ネパール・カトマンズ)
 61 「人工呼吸」法
 62 南アルプス賛歌 日本最大山麓の四季
 63 「私と尾瀬」 24分
 ○ 64 NHKスペシャル 再挑戦ナムチャバルワ 110分
 ○ 65 NBSスペシャル ウォルター・ウエスタン槍ヶ岳への道
 66 早稲田の山 85分
 67 高山植物 45分
 ○ 68 北アルプスの野鳥 40分
 ○ 69 尾瀬 45分
 ○ 70 プナ原生林・朝日連峰 30分
 ○ 71 春に咲く花 30分
 ○ 72 南の島の原生林 (屋久島、三宅島、西表島) 30分
 ○ 73 大雪山の花 30分
 74 スイス・アルプス 57分
 75 ふしぎな花の咲くブータン 26分
 76 アイガー北壁 (F→V) 52分
 77 真川より黒部川、剣沢入り (F→V) 32分
 78 穂高岳賛歌 (F→V) 32分
 79 JAC山岳研究所 (上高地) 13分
 80 フォトクラブ写真展の記録
 81 中国隊チョモランマ (1973)
 82 第1回 日本山岳耐久レース
 83 1989年年次晩餐会
 84 長谷川恒男
 ○ 85 NNNドキュメント'85尾瀬は病んでいる
 ○ 86 NNNドキュメント'86尾瀬汚れちまった悲しみ
 ○ 87 NNNドキュメント'93どうなる日本の山-赤字林野行政の行く末は-
 88 Mt. Everest 8846.10m (測量法=Leica)
 89 雪のハケ岳を歩く (冬山技術を学びながら) 45分
 90 ナンダデヴィ縦走 (日本山岳会) 1976 (F→V) 40分
 ○ 91 日本百名山: 利尻岳、羅臼岳、斜里岳、阿寒岳、
 大雪山 55分
 ○ 92 日本百名山: トムラウシ、十勝岳、幌尻岳、後方羊蹄山
 岩木山 55分
 ○ 93 日本百名山: 八甲田山、八幡平、岩手山、早池峰、
 鳥海山 55分
 ○ 94 日本百名山: 月山、朝日岳、蔵王山、飯豊山、吾妻山 55分
 ○ 95 日本百名山: 安達太良山、磐梯山、会津駒ヶ岳、那須岳、
 魚沼駒ヶ岳 55分
 ○ 96 日本百名山: 平ヶ岳、巻機山、燧岳、至仏岳、谷川岳 55分
 ○ 97 日本百名山: 雨飾山、苗場山、妙高山、火打山、高妻山
 55分
 ○ 98 日本百名山: 男体山、奥白根山、皇海山、武尊山、赤城山
 55分
 ○ 99 日本百名山: 草津白根山、四阿山、浅間山、筑波山、
 白馬岳 55分
 ○ 100 日本百名山: 五竜岳、鹿島槍岳、劔岳、立山、薬師岳 55分
 ○ 101 日本百名山: 黒部五郎岳、黒岳、鷲羽岳、槍ヶ岳、穂高岳
 55分
 ○ 102 日本百名山: 常念岳、笠ヶ岳、焼岳、乗鞍岳、御嶽 55分
 ○ 103 日本百名山: 美ヶ原、霧ヶ峰、蓼科山、八ヶ岳、両神山
 55分
 ○ 104 日本百名山: 雲取山、甲武信岳、金峰山、瑞牆山、
 大菩薩岳 55分
 ○ 105 日本百名山: 丹沢山、富士山、天城山、木曽駒ヶ岳、
 空木岳 55分

フィルム・ビデオ委員会 (ビデオテープ) 保管リスト

- ・ビデオテープ (無記入はVHS) (β)
- ・F→V: 16mmフィルムからビデオテープに変換したもの
- ・○印: 貸し出し可能なテープ

- 1 北アルプス (空撮)
 2 穂高60年史 56分
 3 山男 54分
 4 人間の記録、アルピニズムの先駆者 60分
 5 チョモランマ北壁隊 (JAC) 27分
 6 西藏世界の屋根を行く・ヒマラヤ千古の道 50分
 7 スイス・ベルンのアルペン・ミュージアム 9分
 8 カンチェンジュンガ縦走 44分
 9 カンチェンジュンガ 水曜ロードショー 110分
 10 日本山岳会自然保護委員会 (β)
 11 日本山岳会創立80周年記念番組 45分
 12 第Ⅱ回宮崎ウエスタン祭 40分
 13 マナスルに立つ (1975. 10) (F→V) 110分
 14 ヒマラヤ展 (展示物の紹介) 33分
 15 県境を行く (日本の屋根アルプスを越えて) 54分
 16 ズームイン朝「あどべんちゃーレディ」
 17 早池峰山 17分
 ○ 18 白馬 (今井通子の名山トレッキング「シリーズ」) 53分
 ○ 19 穂高 (今井通子の名山トレッキング「シリーズ」) 54分
 ○ 20 燕から槍へ (今井通子の名山トレッキング「シリーズ」) 54分
 21 アフリカ横断1万キロ (早大赤道アフリカ遠征隊) 90分
 22 エピック オブ エベレスト (1924) (F→V) 17分
 23 ナンダコット征服 (1936) (F→V) 28分
 24 黒部の秋 (1929) (F→V) 30分
 25 スキーツアー (1929~30) (F→V) 12分
 26 冬のロータリー峠パンジャブヒマラヤ (1930) (F→V) 20分
 27 1962ビッグホワイトピーク第2次・3次隊の記録
 (全岳連隊) (F→V)
 28 マナスルに立つ 1987年2月 毎日映画社 (F→V)
 29 ネパールヒマラヤ [ヤルカン登頂-京大山岳会]
 30 オーロラと風車 極地風力発電にかけた男たちの記録
 31 岡部さんディオティバ1960年登山
 32 91-丹沢清掃登山——三の塔〜鳥尾尾根
 33 雪崩を越えて——横浜山岳協会チョゴリ峰登頂記録
 34 ①エベレスト (NHK)
 ②ドキュメンタリー特集日本山岳会エベレスト
 35 立正大・新大合同シルクロード踏査隊記録
 ○ 36 交響詩「立山」
 37 第10回登山医学シンポジウム
 38 新春スペシャル 甦る中央アジア
 極寒のパミールに幻の民を求めて
 39 ヒマラヤを歩いたにほん猿——ムギとQ太と登山隊
 40 槍ヶ岳開山 (播隆)
 ○ 41 槍ヶ岳開山基 (播隆)
 42 魅惑の槍・穂高岳
 43 西穂高岳歳時記 (道松のかおりのする男の山)
 44 燕岳の自然〜美しき時の流れに
 45 山・ヒマラヤに魅せられて
 ○ 46 ヘリコプターによる山岳遭難救助活動
 ○ 47 NNN'91 特集 開発と環境
 ○ 48 やかまし村の子供たち——86スエーデン
 49 21世紀へのウェーブ 生涯スポーツ
 50 MOUNTAINEERING IN USSR ソビエトの登山
 ○ 51 車窓の山旅・中央線から見える山
 ○ 52 美しき季節の流れ・穂高、酒沢
 ○ 53 高山へのステップPART I「岩登り技術」
 ○ 54 高山へのステップPART II「冬季登攀技術」

- 133 花の百名山：塩見岳、荒川岳、天城山、石巻山、藤原岳 55分
- 134 花の百名山：御在所岳、大台ヶ原山、伊吹山、雲仙岳、大江山 55分
- 135 花の百名山：吉野山、稲村ヶ岳、八経ヶ岳、大山、三瓶山 55分
- 136 花の百名山：蒜山、三嶺、東赤石山、石鎚山、多良岳 55分
- 137 花の百名山：雲仙岳、大船山、祖母山、韓国岳、宮之浦岳 55分
- 138 星と語る男たち——富士山頂551日ー 70分
- 139 ヒマラヤ(エベレスト山系)トレッキング(雪崩遭難、事後の記録) 60分
- 140 検証 ヒマラヤ大量遭難事故——NHK「クローズアップ現代」 30分
- 141 '93 JACキルギスタン踏査報告 142「K2 FREE」イタリア隊1963年
- 143 奥国式スキー術——リリエンフェルトスキー術
- 144 KKB「おーい かごしま'96
- 145 「富士山を測る」-1995-
- 146 大山崎山荘(日本人で初めてヨーロッパアルプスに登った加賀正太郎の別荘)
- 147 シルバータートル(ダウラギリⅠ) NHK「プライム11」
- 148 シルバータートル(ダウラギリⅡ) "
- 149 槍ヶ岳を初めて登った男「山岳修行僧播隆上人の生涯」 60分
- 150 昭和5年 上高地、槍ヶ岳、白骨温泉 (F→V) 11分
- 151 日本花の旅 春に咲く花 30分
- 152 日本花の旅 春爛漫・桜の里 30分
- 153 日本花の旅 大雪山の花 30分
- 154 日本花の旅 海辺に咲く花 30分
- 155 日本花の旅 高原の花 30分
- 156 日本花の旅 湿原に咲く花 30分
- 157 日本花の旅 高山の花 30分
- 158 日本花の旅 秋に咲く花 30分
- 159 四季 八甲田 30分
- 160 四季 尾瀬 35分
- 161 四季 上高地 30分
- 162 みちのくの名峰 鳥海山・月山 30分
- 163 神々の相貌(山溪社創立65周年記念作品) 45分
- 164 NHK世界の秘境Ⅱーチョモランマ遥かー 60分
- 165 Mt.Chomolangma (Nihon University Mt.Everest Expedition 1995)
- 166 美しき大地と共に(上高地の懐に生きる)テレビ信州 80分
- 167 EIGER Mittellege Ridge 1994(NTSC) 45分
保存版=167-2 EIGER Mittellege Ridge 1994(NTSC) 45分
- 106 日本百名山：恵那山、甲斐駒ヶ岳、仙丈岳、鳳凰山、北岳 55分
- 107 日本百名山：間ノ岳、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳 55分
- 108 日本百名山：光岳、白山、荒島岳、伊吹山、大台ヶ原山 55分
- 109 日本百名山：大峰山、大山、剣山、石鎚山、久重山 55分
- 110 日本百名山：祖母山、阿蘇山、霧島山、開聞岳、宮之浦岳 55分
- 111 富士山直滑降 30分
- 112 ミルフォードサウンドの山道 ニュージーランド 26分
- 113 アンデスの氷壁に挑む(早大ペルーアンデス遠征1962年)
- 114 山を讀え、山を究める——日本山岳会この10年の歩み20分
- 115 マカルー東稜未知への挑戦——日本山岳会マカルー登山隊1995 39分
- 116 デナリ国立公園の自然 48分
- 117 エベレストへの道——日本山岳会エベレスト登山隊1970ー(F→V) 118分
- 118 花の百名山：礼文岳、利尻山、暑寒別岳、硫黄山、大雪山 55分
- 119 花の百名山：富良野岳、夕張岳、アポイ岳、八甲田山 八幡平 55分
- 120 花の百名山：和賀岳、焼石岳、栗駒山、早池峰山、五葉山 55分
- 121 花の百名山：南蔵王山、田代岳、森吉山、秋田駒ヶ岳、鳥海山 55分
- 122 花の百名山：神室山、月山、朝日連峰、飯豊連峰、安達太良山 55分
- 123 花の百名山：会津駒ヶ岳、高鈴山、石裂山、三義山、尾瀬 55分
- 124 花の百名山：蓬峠、平標山、伊豆ガ岳、両神山、高水山 55分
- 125 花の百名山：川苔山、雲取山、高尾山、天上山、大楠山 55分
- 126 花の百名山：大室山、高松山、神山、幕山、ドンデン山 55分
- 127 花の百名山：苗場山、火打山、大日連峰、五色ヶ原、黒部五郎岳 55分
- 128 花の百名山：白山、甲武信ヶ岳、百蔵山、二十六夜山、三ツ峠山 55分
- 129 花の百名山：熊形山、北岳、戸隠山、志賀高原、白馬岳 55分
- 130 花の百名山：針ノ木岳、双六岳、槍ヶ岳、濁沢岳、燕岳 55分
- 131 花の百名山：蝶ヶ岳、根子岳、高峰山、黒斑山、鉢伏山 55分
- 132 花の百名山：霧ヶ峰、入笠山、宝剣岳、三ノ沢岳、空木岳 55分

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉 弘編

全10巻／新装復刊

日本登山大系

◆バリエーション・ルート・ガイドの集大成◆

◆利尻山から屋久島まで主要山岳の岩場・沢・冬期尾根ルート約4000を完全収録◆

◆豊富なルート図・概念図と詳細な解説◆

◆全国百数十に及ぶ精鋭山岳会、山岳部による執筆◆

岩崎元郎著 ●1700円

沢登りの本(新装版)



白水社

〒101千代田区神田小川町3-24 ●03(3291)7811 ●定価税抜き

- ①北海道・東北の山 4700円
- ②南会津・越後の山 4700円
- ③谷川岳 4300円
- ④東京近郊の山 4200円
- ⑤剣岳・黒部・立山 4400円
- ⑥後立山・明星山・海谷・戸隠 4400円
- ⑦槍ヶ岳・穂高岳 4200円
- ⑧八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス 4400円
- ⑨南アルプス 4500円
- ⑩関西・中国・四国・九州の山 5200円

各A5判／平均320頁 (セット45,000円)

全巻内容

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

宮崎支部

九州中央山地の旅 扇山・向坂山・白岩山・二ツ岳



霧の中を歩けばシャクナゲも歓迎

■霧立つ山吹街道を歩く

春霞にけぶる九州山脈脊梁の、向霧立越（むかうきったちごえ）を霧立越（きったちごし）の南の雄・扇山から遠望したいという永年の夢がかなった。

五月三日早朝、宮崎市のJ.A.アズム出発（参加者十五名）。四時間後、椎葉村松木の扇山登山基地に到着。宿泊・食糧などの装備品をおろし、早い昼食を済ませ、はやる心を抑えて公民館を出発した。四駆車の力を借りて椎茸のほた場・杉林を過ぎると、いきなり飛び込んだきた景觀に固唾を飲む。筆舌に尽くせない見事な黄金の花、ひと重のヤマブキが、林道の両側に数百メートルも群生しているではないか。自然の織りなす芸術にただただ感動するのみであった。扇山をはじめ県北部の急峻な溪壁の平均傾斜度は、日本アルプス、上越の山に次ぐ国内第三位だとの支部長の説明に納得。かつて源平の時代、平家追討の武将たちが、また山里に住む人々が生活通商の道として、額に汗して歩いたであろうこの厳しい山道を、初参加者の歩調に合わせて進む。五十五分で八合目の山小屋・水場に着く。滲み出る水はまさに「石楠花の水」である。

ここから二十分、尾根道を散策気分です歩いていると霧の流れが速い。

雨近しと一斉に雨具を着用する。突如として大粒の雨が降り出す。立ちこめる霧のなかに扇山（一六六一メートル）山頂の三角点を確認。雨に濡れた新鮮なシャクナゲの歓迎に感嘆の声。ホッとする間もなく踵を返して山小屋に急ぐ。一時間の待機中に霧は流れ去り、向霧立越の国見岳、五勇山の雄姿が顔を出す。歌人のNさん、Hさんは即詠を披露する。人それぞれの持つ感動の源を垣間見る思いで勉強させていただく。

■石灰岩の小さな芽吹き

二日目は、源平伝説の鶴富屋敷・八村杉を見学したのち、霧立越の北端、白岩峠（一五五八メートル）を経由して向坂山（むかうさかやま）と白岩山（一六四六メートル）に向かう。波帰から向坂山への登山道は、九州南端のスキー場（五ヶ瀬ハイランド）の開業とともに舗装され、スキーリフト、ロッジ、売店などが整備され、峠の風情が消失したことは悲しい。整備された遊歩道を歩きながら、ブナ・ミズナラ・ホオノキ・ヒメシヤラ・ナツツバキ・カエデ類の新芽や可憐なシロモジの黄花、コミヤマスマミレ・フデリンドウ・バイケイソウとの出会いで心も和み、白岩峠まで三十分。さらにコマドリ・ウグイス・ヒガラ・ヤマガラ合唱を聞きつつ向坂山頂上まで三十分。

再び白岩峠に戻り、白岩山まで三十分。石灰岩のこれらの山は、五ヶ瀬川の源流で、延岡市までの流路は八六キロ、高山植物四百四十四種を育んでいるという。白岩山山頂は、連休の中日とあって満員御礼。石灰岩に生育するウスユキソウ・イワギク・トリカブトの新芽が可愛らしい。

一行は、明日の登山のため、五ヶ瀬川沿いに高千穂町を経由して日之影町のTR（高千穂鉄道）日之影駅の温泉で二日間の汗を流す。戸川公民館での夕食会は豪華。山菜・川魚料理に舌鼓を打ち、明神岳の岩峰に輝く満天の星座を眺めつつ一句をひねり、深い眠りについた。

■ヒカゲツツジの花と風の峠

三日目は、再び急峻な二ツ岳（一二五七メートル）を目指す。登山口の清流は冷たく、精気がよみがえる。造林作業用の小屋は土石流の餌食となり、杉林に散乱する岩石は無残。額に吹き出す汗を指で打ち払いながらも心肺機能は絶好調。足元にはフタリシズカ、ハナイカダが咲き、オオルリ、オオアカゲラ、ウグイス、ツツドリ、センダイムシクイの鳴き声に耳を傾ける。センダイムシクイの鳴き声は「焼酎一杯グイー」とユニークだ。

一時間五十分で、石仏が安置された尾根道に着く。清風に凌駕される。

ここを「風の峠」と名付けようか。
 雙手もて杖を突きたてたちいこふ
 森の深みにわが心燃ゆ 牧水

この歌に出会った感動がよぎる。
 眼下には、公害で話題となった高千穂町土呂久地区。八合目の二ツ岳八幡神社本宮の祠を過ぎると、黄色の花をつけたヒカゲツツジの群生地。三十五分で山頂着。

花の過ぎた大木のアケボノツツジの花びらの舞い落ちる下で昼食。祖母、傾山は指呼の間。帰路は、急坂を一気に下り、一時間三十分で登山口着。清流で顔を洗い、酷使した足を冷やし、三日間の山旅にそれぞれが熱い思いを込めて帰路につく。山よ、溪よ、ありがとう。(井野元繁)

東九州支部

新緑の定例山行

西会員の受賞祝賀をかねて

東九州支部では毎月一回、会員・会友で定例山行を行っている。今年度の第一回は、県北の名勝裏耶馬溪山群の中摩殿畑山(なかもだんのほたやま・九九一メートル)と、釣鐘山(つりがねさん・八五二メートル)の新緑縦走コースを選んだ。

また、会の事務局を永年担当している西孝子さんが昨年十一月、ネパールヒマラヤのコンデリ峰(六〇一



中摩殿山頂で西会員のお祝いセレモニー

メートル)単独登頂の快挙により、地元新聞社から三月二十五日に表彰された。そこで受賞の祝賀登山も兼ねることになった。

四月二十日(日)、好天に恵まれ、総勢三十八名は自家用車六台に分乗して五時、大分の事務局を出発。いつもより多い参加者で配車に手間取ったが、一路高速道路を玖珠インターへ。ここで一台合流、さらに登山口の市平上集落で日田から参加の二台が合流し、下山地の岩伏の集落へ全車輻を回した。

七時五十分、釣鐘山への登りにかかる。新緑の登路にはワラビやタラ

しの芽が顔を出している。それを探りながら約一時間の登りで山頂に着く。遅れる者もなく快調なペースで、一汗かく。

記念撮影ののち、縦走コースへ向かう。踏み跡のしっかりとした岩混じりの尾根を快適に飛ばす。行く手には目的の中摩殿畑山が見え隠れする。数回のアップダウンを繰り返して、彦見岳(八九六メートル)から急な下りを慎重に下る。咲き始めたツツジの鮮やかなピンクが目飛び込んで、疲れをいやしてくれる。小さなこぶを二つ越え、やがて林道に出る。最後のところは運材用のケールを止めてもらい通過する。林道をだらだらと歩くこと三十分、登山道を左へとり、十五分で中摩殿山頂に着く。

山頂には、林道経由の仲間や祝賀登山取材の地元紙の記者が待機していた。早速お祝いのセレモニーとなる。全員輪になっておめでとうの万歳を三唱し、乾杯。西さんのお礼の言葉「本日山を歩いて改めて幸福を感じた」というのは実感であろう。記念の横断幕の前に記念撮影。二万五千分の一の地図の裏に、参加者全員のサインをして西さんに手渡す。

好天に恵まれ、最高のお祝いのプレゼントとなった新緑の一日山行であった。(加藤英彦)

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-3 TEL.03-3816-4161

味の技、心でつくる



むさし 日比谷店
 (東宝ツインタワービル9F)
 千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
 むさし 麹町店
 (有楽町線麹町駅)
 千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
 むさし 神田西口店
 (神田西口通り商店街)
 千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
 友膳うどん
 (半蔵門線半蔵門駅3分)
 千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
 千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

「白神山地問題」について 石田稔郎氏に答える

自然保護委員会

「会報」六二二号に、当委員会が提出した意見書について石田会員からの意見が掲載された。世界遺産に登録された「白神山地」の入山規制の是非をめぐるいろいろな意見があり、私どもとしては平成七年度の自然保護全国集会でこの問題を取り上げ、全国支部の自然保護委員会を中心として討議を行った。その時の集会としての結論は「さきに青森支部長名で出した「規制反対」の意見書は委員会として再検討すべきである」ということであった。

これを受けてその後数回にわたって定例委員会で議論し、要望書としてまとめたものである。石田氏は一

部の委員といわれるが、この要望書の内容について、全く異なった意見を述べる委員はいなかった。

■地元登山団体は規制反対

昨年十一月、青森支部長から「白神山地問題を考える登山者の集い」に参加してほしいとの要請を受け、当然、その意見調整を期待して参加した。

しかし、その集会は「規制反対」をまとめることを目的としていた集会であり、意見交換は皆無であった。集会終了後、「規制反対」を打ち出し、私どもに何等の説明もないままに「入山規制反対」の決議をして意見書を提出したようであった。

石田氏は前記平成七年度の全国集会にも参加され、また、青森市での「登山者の集い」にも出席しておられたので、このあたりのことは十分承知しておられるはずである。

ならば、その集会の時、何ゆえに発言されなかったのか。自然保護の問題については、会員によって見解が違ふことが多く、そのためにお互いに議論することによって、より正しい意見ができ上がると思う。その場にいながら意見を言わず、後になって自分と違ふ意見に集約されたことに對して、このように抗議することはフェアでない。

我々の意見書は理事会で説明を行った上、提出したものであり、これまでの慣例に従ったものである。

■「尾瀬の例」について

次に「尾瀬の例」が不当であると述べておられるが、尾瀬の例は観光地として知名度が上がると、交通機関の発達に伴って、当初の予想を遥かに上回る観光客が訪れて、生態系に甚大な影響を与え、回復不能になることの例証として上げたものであって、石田氏の指摘するような距離的な条件などは問題ではない。むしろ、同氏の論法のように生態系に与える影響を過少評価して自分たちの行動の束縛を受けまいとすることこそが「登山者のエゴ」と言うべきではなからうか。

■「規制」のあり方に最終結論を

去る三月三十日付の新聞報道によれば、「白神山地世界遺産地域連絡会議」の委託を受けた青森県側の「白

神山地世界遺産地域懇話会」が最後の会合を開き、最終結論として「核心地域内に二十八本の指定ルートを設定、これらのルートに限り事前の届け出を条件に入山を認める」とする結論を出したことが報じられた。秋田県側の「懇話会」は「入山を基本的に認めない」とする結論を出すに出しており、両県の対応に異なる点はあるが、入山を規制することには変わりなく、大要において当委員会の出した意見書の線に沿うものである。

この結論をもって「白神山地問題」は、とかく「入山規制」に対する是非のみが議論対象となってきたが、「世界遺産」として全世界の人々から後世に伝えることを託された我々日本人が「どのように保全すべきか」をさらにきめ細かく議論すべきであって、それに対して意見を述べるのが我々山岳人としての務めであると思う。

(澤井政信)

白神山地についての 石田氏への反論

西口正司

会報「山」六二二号で、石田氏は「青森支部は入山規制に反対」と決めつけておられるが、これは事実と

異なる。支部には規制に賛成の会員も多いからだ。

自然保護委員会の意見書は、あくまでも「次代に残そう美しい山と溪」の基本理念に基づいた正論であり、百年先を見越した、妥当性のある卓見と思う。

美しく豊かな自然に多くの人が入り込めば、自然が汚れるか、汚れないかは誰の目にも明白である。私は会報六二二号の中村副会長の意見に賛成だが、自然保護委員会や自然保護全国集会では、さらに十分意見を出し合い、討議を重ねて、前記の意見書に達したものであろう。

石田氏は、白神山は、首都圏から遠く、交通も不便で、入山者の増加はあり得ないとされているが、現状を見る限り、事態は全く逆である。登山者のほか、釣り人の増加はさらに激しく、イワナの減少やゴミの増加、踏み荒らしなど、目にあまるものがある。

私は白神岳の麓に生まれた会員であり、現在世界遺産ボランティアの巡視員委嘱を受けている。白神岳の頂上から周囲を眺めると、ブナの原生林が大海のように広がり、山並み

の彼方には、秋田県側の世界遺産地域が広がる。これほど大面積に残された原生的天然林はほかにはない。日本一の豊かな生態系の宝庫であると確信している。

美しい自然を守り、故郷の山を誇りに思う地元民には些かも他意などない。ただ、かけがえのない白神山が汚されていくのを見るに忍びないだけなのだ。白神山は、私たちにとっても、次代の人々にとっても宝物なのである。

坂倉登喜子さんの出版記念会

勝田房治

四月二十四日、アルカディア市ヶ谷で坂倉登喜子さんの出版記念パーティーが開かれた。

『心に残る花の山旅』(四月発行)で次々と山の本を発表される坂倉さん。山に咲く花と山旅をめぐる集大成でもちろんエーデルワイスの探求もしっかりと盛り込まれている。昨年一月発行された山と地酒シリーズの『関西周辺山と地酒の旅』も合わせての祝賀会である。

今年もさくやんでは会いましょう



賑やかに華やかに、出版記念会

三水会、エーデルワイス・クラブ合同の肝煎りで設定された会場には、各界より百五十名もの方が参加され、明るく和やかな雰囲気の中、辻橋明子さんの司会で始まった。三水会・木村代表の開会挨拶に続いて、日本山岳会からは村木会長、三水会の片岡博さん、新ハイキングの小林社長と、次々にユーモアあふれる暖かい祝辞が贈られる。

実業之日本社、新潮社など出版関係者の紹介が済み、満を持したバイキング料理と寄進の銘酒多数(越の寒梅、うすゆき草、玉の光、八海山等々)がところ狭しと並べられた中、神谷恭平さんの音頭で乾杯に移る。

【世界の山旅・辺境の旅】夏版総合カタログ(全108ページ)、ご購入下さい。

●ヨーロッパ・スイス・フランス・チロル・アルプス・ハイキング ●モンブラン登山 ●カナディアン・ロッキー・ハイキング ●アフリカ・キリマンジャロ登山 ●南米・ペルー・トレッキング ●バキスタン・K2エアーサファリとナンガパルバット・ディラン・ラカポントレッキング ●K2バルトロトレッキング ●インド・ラダック・中国・四姑娘山トレッキング ●天山山脈トレッキング ●カムチャッカ・ペリハイキング ●聖山カイラストレッキング ●マレーシア・キナバル山登山 ●台湾・玉山・雪山登山 ●日本の山旅 ●アメリカン・ロッキートレッキング、ホイットニー山登山 ●カザフスタンなど多数掲載しております。

※その他、個人旅行、登山、航空券手配なども承っております。

運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/IATA公認代理店
アライアンスサービス株式会社

本社/〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911
大阪 06-444-3033 名古屋 052(581)3211 福岡 092(715)1557
仙台 022(265)4611 広島 082(542)1660 札幌 011(711)7106
●詳細ツアー・パンフレットをご請求ください。(株)りんゆう観光

有り余る銘酒は選り取り見どりの飲み放題。地酒の旅シリーズでもまた坂倉さんのバイタリティーを見せつけられた。玉の光の鏡割りで宴は最高潮。今井喜美子さん他大勢の方からの祝電、メッセージの紹介、山下順子さんが代表しての花束贈呈、そして坂倉さんの未来の出版抱負を含めた力あふれるお礼の挨拶まで、和気あいあいの盛り上がりが続く。

二時間余りの宴は全員合唱で締めくくられた。雪山賛歌が始まる頃から、あちこちにスクラムが広がり、「今日の日よりさようなら」では全員肩を組んでの大合唱で出版記念会のお開きを飾った。(写真・羽田栄治)

図書紹介



イラスト 野田四郎

中村 進・著

『南極点スキーマラソン 未知への旅』

北極点、エベレスト、南極点を制覇した著者が語る南極スキーマラソン紀行である。極点を制覇した偉業というより、仲間とともに南極点へ到達するまでの難行苦行を細部にわたって記したものだ。

著者らは一九八八年五月エベレスト山頂からのテレビ中継に成功、平地の四分の一の酸素と極寒の世界を体験した。そして新たな自然との出会いを求めて、挑む相手は自分自身であるとして、クロスカントリースキーで独走するという計画を立てる。南米チリからプロペラ機でマゼラン海峡を越え「広大無辺、白い大きな海に見えた」南極大陸へ。一九九

四年十一月十三日、南緯八〇度標高ゼロメートルのハーキュリーインレット入江から、南極点へと二二〇〇キロメートルの旅が始まる。

呼吸でリズムを取りながら、強い向かい風のカタバ風や地吹雪と戦い、サルツルギやヒンドクレバスを越え、仲間のスノーモービルとともにGPSの計算値を基に南極点めざして進む。標高二〇〇〇メートル、マイナス二〇度から三〇度の白い世界をスキーで走る。南極特有の気象に出会いながらついに十二月二十一日南極点に到着。美しい極地の真つ青な空を見上げながら、南極だけでも未来のためにこのまま残しておきたい、と著者は思う。スキーマラソンの感激は極点にあったか途中経緯にあったか、読者をして一気に読破させる魅力に満ちた一冊である。(林 栄二) 一九九六年十二月 読売新聞社発行 二四五ページ 千五百円

豊田和弘・著

『つうぽっちの叛乱 —つうちゃん巻機に生かす—』

上越国境の山、巻機山の新潟県側山麓の集落清水。二十軒ばかりの民家が国道沿いに建っている。現在、上越国境の交通の要所は三国峠に移って、清水峠は時代に置き忘れられ

てしまい、過疎の村である。

昭和六十年代、ご多分に漏れずこの村も列島改造、リゾート開発の嵐の中に巻き込まれることになる。集落でただ一軒の民宿の親父が、開発に反対を唱え、保守的なムラ社会の中で厳しい村八分にも遭いながら信念を貫き通し、最後には大企業の開発を断念させた。この民宿の親父、山の宿「雲天」の「とうちゃん」と小野塚忠男さん夫婦の人となり、民宿を通じての常連客(主に東京の大学の山仲間)との交流物語である。バブル崩壊の今日ではともかくあの時代に自然保護、過疎の地域の生き方などに、これだけの信念を貫くことは至難のことと思われる。ここに清水から車で三十分の湯沢の町の現在を見ると、どちらが村のための正しい選択であったかがよくわかる一文である。(南井英弘)

一九九六年十月 山と溪谷社発行 二二二ページ 千六百元

N. P. Jevlevsky: MONGOLIA

Translated by E. D. Moran
Asian Educational Services 1991

ロシアの軍人によるモンゴル及びチベット北部の探訪旅行の記録。一九世紀半ば過ぎに三年間にわたる東アジア高地の旅は、当時まだ情報の

乏しかった地域の地理と文化の発見の旅でもあった。N・プレジエヴァルスキーの報告がロシア地理学会を経てイギリスの地理学者の注意を引いた。一八七六年にロンドンで二巻の英訳本として出版され、一世紀以上の後インドで復刻本としてよみがえった。

I 巻二八七ページ II 巻三二〇ページ

ビット・シュールベルト・著

黒沢孝夫・訳

『生と死の分岐点』 山の遭難に学ぶ安全と危険

原題は「Sicherheit und Risiko in Fels und Eis」。一九九四年、ドイツ山岳会安全委員会の二十五年にわたる安全問題研究に関するこれまでの成果を集大成して、委員長である著者が公表したもの。事故を避けるにはどうすればよいか、起きてしまった事故はどうすることもできないが、これまでの事故から事前に学び、周知された事故原因を避けることができる。同じ事故を何度も繰り返すべきではない、という。

内容はドイツ山岳会安全委員会の二十五年一理事長、副理事長記を序とし、凡例(用語等)、遭難事故に学ぶ、天候の悪化、落雷、ロープ、

山と医療

時差・日程への順応も必要

滝 和美

ネパールでの中高年ツアーの参加者やトレッカーたちを診察したり、治療したりして感じたことは、皆が日本国内で、そこそこ山行を続けており、全身疾患で治療中の方はほとんど見かけないことであった。

しかし、乗り物酔いを経験したことのない人が悪路で簡単に嘔吐するような状態になったり、初めてでもないセスナ、ヘリコプター、そして飛行機でもすぐに酔ってしまう人が多かった。

食事や飲料水に気をつけてミネラルウォーターだけを飲んでいても、かなりの人が下痢を起こしていた。

原因は何であろうか？

ネパールと日本の時差は、3時間15分しかないが、出発を準備するまでの仕事の片付けでの睡眠不足や夜行便利用などで、疲れを残したままで入国する人が多いようである。

そして到着早々、早出のトレッキングなどが始まると、当然バイオリズムは崩れ、ホルモンバランスも狂ってくる。加えて分刻みともいえる過密なスケジュールが続き、個人旅行でもない限り、疲労回復を図る十分な休養をとる間もなく、行動が続く。高山病にかからないまでも、体調不良を起こしても当然といえる日程がほとんどである。動けなくなって皆に迷惑を掛ける前に、疲労と体調不良を感じたら、一人だけでも行動を中止して休養をとり、現地に順応する時間をとるべきである。

高所順応の前に、時差と日程への順応時間を確保して適切な疲労回復を図り、体調を維持してこそ安全な登山を楽しめると思う。

とくに初めての海外登山の場合は要注意である。

化学薬品、カラビナ、アンザイレン、ブリーン結び、懸垂下降、トップロープ、登行器、残置支点、股間のロープ、退却、ヘルメット、その他の事故、キーネ・スウィング、クレバス、パートナーの墜落、奇妙な事故、山岳救助、墜落と死、おわりに、と十二項にわたっている。

一九三五年生まれの著者は初登攀歴を持つ尖鋭クライマー。航空、ロック、産業の設計技師で装備の安全向上に尽力している。読者は装備・登攀行動のあらゆる面で無知と過誤に気づくことになる。(三沢一三)
一九九七年二月 山と溪谷社発行
三〇三ページ 二千六百円

図書室受入報告 (1997年4月)

著者	書名	頁・大きさ	出版元	発行年	寄贈/購入別
長野県松本深志高校(編)	西穂高岳落雷遭難事故調査報告書 (1967. 08. 01)	336pp/26cm	長野県松本深志高校	1969	田中弘美氏寄贈
小川誠	3000mのドラマ「穂高」：小川誠写真集	82pp/25cm	東京新聞出版局	1997	出版社寄贈
ゲーデ(著)島田莊平・他(訳)	アルプス4000m峰登山ガイド (アルペンガイド海外版)	223pp/19cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
串田孫一 他 (共編)	立山 (日本の名山 第8巻)	253pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
澤田啓 (編)	クロカンマップ (2)	164pp/21cm	白山書房	1997	出版社寄贈
坂倉登喜子	心に残る花の山旅：とっておきの花の山・エーデルワイス咲く山	259pp/20cm	実業之日本社	1997	著者寄贈
柴田初子	私の登山人生：高尾山からヒマラヤまで	150pp/22cm	日本の名山を選ぶ会	1997	著者寄贈
菊川忠雄 (編)	日本の高山植物・和名および学名解説 (第3版)	166pp/30cm	日本の名山を選ぶ会	1997	編者寄贈
山口峯生	大いなる山	186pp/23cm	山口ふみ(私家版)	1997	著者寄贈
大分県山岳連盟 (編)	党河南山 (祁連山脈未踏峰)：大分県日中友好登山隊'94	101pp/26cm	大分県山岳連盟	1996	発行者寄贈
日本学術振興会 (編)	秩父宮記念学術賞記念誌	203pp/30cm	日本学術振興会	1997	発行者寄贈
東洋大学体育会山岳部(編)	東洋大山岳部1995年度冬山合宿事故報告書Ⅰ：戸隠連峰・西岳	116pp/26cm	東洋大学山岳部	1997	発行者寄贈
ミシュレ(著)大野一造(訳)	山	266pp/22cm	藤原書店	1997	出版社寄贈
手塚宗求	山里の音楽譜	179pp/20cm	恒文社	1997	著者寄贈
国土地理院地図部 (編)	5万1地形図作成・所蔵目録 (国土地理院技術資料)	418pp/30cm	日本地図センター	1997	編者寄贈
内田嘉弘	京都丹波の山 (下巻)：丹波高原	267pp/20cm	ナカニシヤ出版	1997	著者寄贈
紀村朋子 (編)	駅前登山55コース・東京周辺 (目的別AGビッグフット)	134pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
岡本良治	山里そのまま (写真集)	88pp/18cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
Reinhold Messner	Die Rote Rakete am Nanga Parbat	223pp/22cm	Nymphenburger	1971	購入
C.G.Bruce	Kulu and Lahoul	307pp/23cm	Edward Arnold	1914	購入
Wilhelm Filchner	Om Mani Padme Hum	352pp/24cm	F.A.Brockhaus	1929	購入
Frederic Drew	The Jummo and Kashmir Territories : A Geographical Account	568pp/24cm	Edward Stanford	1875	購入
Donald Rayfield	The Dream of Lhasa : The Life of Nikolay Przhevalsky	221pp/23cm	Paul Elek	1976	購入
Gunter Oskar Dyhrenfurth	Baltoro : Ein Himalaya-Buch	/26cm	Benno Schwabe	1939	購入
N.Prejevalsky	Mongolia (1)(2) [Reprint] : The Tangut Country and the Solitudes of Northern Tibet	287pp/320pp/23cm	Asian Educational Services	1991	購入

会務報告

【四月理事会】

日時 四月十七日(木) 十八時四十分
二十時四十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 村木会長、斎藤、宮下各副会長、大屋、吉永、中川、大谷、松浦、伊藤、南井、渡邊、溝口、田邊、宇田川、熊崎各理事、川崎、石橋各監事、小倉、大倉、村井、大森、神崎各常任評議員

委任 中村副会長、水野、堀井、山本、大蔵各理事、重廣常任評議員

【審議事項】

(一) 資料借用の件 大屋

日本民俗資料館より、松本市制九十周年記念事業写真展「ウエストンの見た明治・大正の日本」の開催にあたり、特別展示として「ウォルター・ウエストン」を描いた石田吟松のスケッチブック一冊の借用と、写真「河童橋上のウエストン一行」の複製の展示許可願が出された。(期間五月二十二日～六月二十三日) 承認

(二) 神奈川県立近代美術館より「自然の美・生活の美」ジョン・ラスキンと近代日本」展のカタログ制作(五月二十五日発刊、売価二千八百円)に際し、本会所蔵の志賀重昂著

『日本風景論』(初版)とウエストンの「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」二点の撮影許可願が出された。承認

(三) 榎小学館より、六月刊行予定の「木の聲」の一節(上高地を開いた男)に「河童橋上のウエストン一行」の写真掲載及び借用願が出された。承認

(四) 榎白水社より「日本登山体系」(前十巻・初版一九八〇～一九八二年)の本年六月復刊にあたり、日本山岳会会員に案内状を送りたい、と宛名シール打ち出し依頼要請が出された。(有料購入) 承認

(五) 平成八年度事業報告の件 大屋
総会提出資料説明。承認

(六) 平成八年度収支決算書、財産目録の件 吉永
総会提出資料説明。承認

(七) 財務監査の件 川崎監事
平成八年度の収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表、及び財産目録を監査し、正確妥当なことを認める。(四月十五日実施) 承認

(八) 役員及び評議員改選の件 宮下
四月十六日評議員会議が開催され、副会長を除く理事、監事は別紙の通り推薦された。なお副会長候補については、村木会長、斎藤副会長に一人された。承認

四月十七日理事会終了後、村木会

長、斎藤副会長の話し合いの結果、副会長候補として、小倉茂暉、大森薫雄、竹内哲夫各会員が推薦された。(九) エベレストデーの件(前回より継続審議) 大屋

ネパール山岳協会より五月二十七日～六月一日カトマンズで開催の記念行事への出席要請に対し、神崎常任評議員に出席をお願いする。承認
(十) 事務局職員の永年勤続表彰の件 大屋

本会事務局、杉山職員の勤続二十五年に対し、五月の本会総会において会長名で表彰を行う。承認

【委員会報告】

●図書管理委員会・大屋

雪水学会に対し「雪水」などのバックナンバー寄贈要請の依頼状を出した。対案として、必要であれば「山岳」「云報」交換の条件を付した。

●総務委員会・中川

①五月十七日(土) 十時三十分 支部長会議 十四時 日本山岳会総会 十六時三十分 懇親会(会費三千円) いずれもグリーンホテルで。

②団体傷害保険 四月十七日現在、加入者六百七十名(開始以来怪我八名)。加入者が千名を超えると掛け金が一五パーセント割引になる。

③海外トレッキングの場合、死亡と障害は補償されるが、搜索費用は出ない。

●集委員会・中川

①四月十三日(日) サクラハイイク 奥多摩浅間嶺、現地集合、現地解散。96期二十七名参加、頂上で鍋を囲んで懇親会を開いた。

②五月十日(土) 十一日(日) 若葉会山行偵察。

③五月二十四日(土) 二十五日(日) 第二十一回若葉会山行、薬師岳・和賀岳。(秋田支部が協力)

●指導委員会・熊崎

①三月二十一日(金) 二十三日(日) 志賀高原において初中級者対象山岳スキー研修会を開催、参加者は高塚武由主任講師以下十八名。天候に恵まれ笠岳、焼額山、竜王山他のコースにおいて、雪洞構築訓練など危急時対策を含め予定通りの研修を行った。

②四月十二日(土) 十四日(日) 谷川岳において中上級者対象山岳スキー研修会を開催。参加者は熊崎和宏主任講師以下十一名。天候に恵まれ、谷川岳、天神尾根、熊沢沢、一の倉岳、芝倉沢他のコースにおいて、クレバス転落者の救助技術などの訓練を含め、予定通りの研修を行った。

(詳細は会報「山」に報告の予定)
●自然保護委員会・大森常任評議員
(大蔵理事は海外登山遠征中)

白山山地でブナの植林をすることについて、青森支部長ほか一名を含む三名が鯉ヶ沢町長、営林局関係者

と懇談し、将来にわたって協力することになった。今後の活動については青森支部、自然保護委員会と検討。

●山岳研究所運営委員会・溝口

平成九年春期・県道上高地公園線ルートの規制について説明。

●山岳編集委員会・田邊

「山岳」九二号編集内容案提示。

●海外連絡委員会・神崎

①ネパール・ポカラ山岳博物館建設の現況。

②UIAA (国際山岳連盟) の現況。

③AAUA (アジア山岳連盟) の現況。

④HATJについて。

■会員異動

物故

玉川勝彦 (一一〇五八) 9・4・21

退会

小堤達雄 (五二三三) 9・4・30

鈴木利也 (九三二〇) 9・4・30

中尾志津子 (一一一四〇) 9・4・30

改名

坂神昌始 (一一九四五) ↓坂神列一郎

ルーム日誌

4月

1日 山岳編集委員会 アルパイン

スケッチクラブ

2日 青年部 96同期会

3日 常務理事会 山の自然研究会

4日 フォトビデオクラブ

7日 総務委員会

8日 二火会 アルパインスケッチ

9日 ジャック93会

10日 集委員会 学生部

11日 財務委員会 アルパインスケ

14日 ツチクラブ

資料委員会 アルパインスキ

15日 会計監査 フォトビデオクラ

ブ

16日 常務理事会 評議員会 三水会

17日 理事会

21日 総務委員会

22日 自然保護委員会 フォトビデ

23日 オ委員会

アルパインスキークラブ 96

24日 同期会

科学委員会 集委員会

4月来室者576名

◆INFORMATION

◆日本山岳画協会展



山を愛する画家たちが描く山岳風景、山の風物など二十五点を展示。

期間 七月九日(火)〜十五日(火) 十一

時〜十八時三十分(十三、十

五日は十七時まで)

会場 朝日アートギャラリー

中央区銀座四一〇一

TEL・〇三三五六七一六七一

◆松田敏男・山の版画展

漆による山のシルクスクリーンを

中心に花のある山岳風景、樹林など。

期間 七月二十二日(火)〜八月三日(日)

十二時〜二十時

(七月二十八日休館)

会場 平安画廊

京都市中京区寺町通三条上ル

TEL・〇七五二二三一〇六九四

◆山梨県芦安村誌「南アルプスの登

山史」別刷り頒布のお知らせ

平成六年一月発行の山梨県芦安村

発行の村誌に「南アルプスの登山史」

(田畑真一執筆)が掲載されています。

このほど芦安村のご好意により

別刷り(B5判八〇ページ・写真六

〇枚)を作製しましたので、ご希望

の方は左記にお申し込みください。

頒価 九百円(誌代六十円 送料

二百四十円) 切手(八十円な

ど小額のもの)で代用可。

問合せ 二二三三 座間市相模が丘

四一六六一二二 田畑真一

TEL・〇四六〇一五三三八九八九

■訂正 六二四号(五月号)八ペー

ジ四段二行目の「長野電鉄」は「長

鉄」に、「二ページ一段二五行目」石

田兵七・著」は「兵一」に、同ペー

ジ二段三〇行目の番地「三二七六」

は「三一・七六」の誤りでした。お

詫びして訂正します。

◆編集後記◆

本号をもちまして、会報編集の私の仕事は終わります。平成五年七月号から本号まで、会員の皆様方にはたとえようもないほどご支援、ご協力をいただき、お陰様でなんとか大任を果たすことができました。厚く御礼申し上げます。

次号からは次の編集委員により会報の発行が続けられますので、旧に倍するご支援をお願いいたします。

理事・村井 葵

委員・小倉董子、伊藤 敏、大屋梯

二、小倉 厚、高田真哉、奈

良原町子、江本嘉伸、細井澄

子、富士田鍊子(伊藤 敏)

日本山岳会会報 山 625 号

1997年(平成9年)6月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社